

教室「フロア」の相互行為的産出 —小学校におけるビデオ観察をもとに—

上田 智子（お茶の水女子大学大学院）

1. はじめに

教室における日常的な出来事に、「授業からの脱線」と呼ばれるものがある。また、教室においては、構成員やその物理的配置など相互行為の外形の変化を必ずしも伴うことなく、「授業に入る」「授業に戻る」などということが語られ、また実際に行なわれている。教室空間においては、こうした「脱線」を可能とし、「入ったり」「戻ったり」する対象として、成員にも観察者にもその「実在」が特定できるような「授業」が存在するといえる。

本発表で、「フロア」と呼び、考察の対象として設定しようとしているのは、こうした観察可能性としての「授業」である。「授業」の観察可能性とは、いったい教室という社会的空间のどのような詳細から成立しているのだろうか。

2. 「授業」の記述という問題

教育社会学の文脈においては、教室の中で起こっていることを、教室内相互行為として定式化し、記述しようという試みが行なわれてきた。

こうした試みの多くは、教室でのミクロな実践をより広範な社会学的問題意識と関連づけることに関心を持っており、その研究の目的は、例えば、学校における日常的相互行為を研究することによって、教育達成の階層間格差や社会的不平等の再生産のメカニズムを発見する、というようなものであった。

本発表で行なおうとしているのは、それらの議論が前提としている、「授業」の「授業」としての観察可能性を検討である。すなわち、

「授業」として観察可能な相互行為があるとしたら、そもそも、こうした「授業らしさ」とは、どのような場面の詳細から成り立っているのか、という問題設定を行なうのである。

マクベス (Macbeth,D.H.) は、こうした「授業」の観察可能性を「フロア」という名前をもって特定した。「フロア」は教室分析の道具となるような、研究者のための分析概念ではない。日常的には「実在」として取り扱われるところのものであり、分析の過程では発見・例証の対象となるものである。

3. 「フロア」概念の独自性

教室内相互行為がどのような特性から成立しているのか、その成り立ちそのものに焦点づけた研究が、これまでに全く存在しなかったという訳ではない。稻垣 (1992) は、数こそ少ないが、これらの研究を「クラスルーム研究の独自の方向性を示すもの」として評価している。

しかし、これまでの研究が、会話の内容や形式など、もっぱら教室におけるトークに焦点づけたものであったのに対して、「フロア」という概念の独自性は、ビジュアルな要素をも分析の視野に収めようとする点にあるといえる。

「教室で何が起こっているか」を十全に記述しようという関心に対して、トークへの焦点づけは、やはり部分的であるといわざるを得ない。物理的・空間的な資源もまた、人々の相互行為と結びつくことによって、「授業」の観察可能性を組織化しているという側面にも目を向けてはならない。そういった問題意識が、「フロア」という概念には含まれているのである。

4. 「教師一生徒関係」の記述という問題

観察可能性に関する議論は、相互行為の記述にだけでなく、社会関係の記述という問題にも同様にあてはまる。

教師一生徒関係は、非常に特殊な社会関係であることが直観されている。このような教師一生徒関係の「特殊性」（という観察可能性）は、換言すれば、「教師一生徒関係らしさ」の観察可能性である。本発表の第二の目的は、こうした「教師一生徒関係らしさ」の観察可能性を実践的行為による達成効果として捉えること、そして、この「教師一生徒関係」の観察可能性と、先に論じた、「授業」の観察可能性とが、分かちがたく結びついている、ということを示すことにある。

* * * *

もちろん、こうした視点には、既存の研究への批判が示唆されている。すなわち、「授業」という文脈（場面のカテゴリー）や、教師一生徒といった社会関係（成員カテゴリー）を、所与のものとして教室内相互行為の分析に取り込んでしまってよいのか、という問題意識である。すなわち、「授業」という文脈や、教師一生徒といった成員カテゴリーが、レリヴァントとなるようしなかつておいてのみ、われわれは、ある「授業」について、またはある「教師一生徒関係」について、その特性を何らかの形で記述することができるのである。

5. エスノメソドロジーという方法

授業の観察可能性、すなわち授業の「フロー」を発見するのに、本発表が依拠する方法はエスノメソドロジーと呼ばれる方法である。

エスノメソドロジーは、「社会的事実」の事実性を、相互行為場面を構成する人々の不断の実践によってそのつどそのつど達成される効果として捉え、その組織化を記述しようとする。

さらにエスノメソドロジーが扱おうとしているのは相互行為場面の観察可能な組織化である。あらゆる場面は、「既に」「十分に」組織化されているが、それは、常に「観察可能なし

かたで」組織化されているという立場をとるのである。

こうした主張には、同時に、自然言語の使用者（＝“メンバー”）にとって観察可能なことがらしか扱わない、主張／例証の根拠は、記述の中に観察可能なものとして提示されていなくてはならない、という分析上の厳密さと経験的な保証への志向を見ることができる。エスノメソドロジーが記述しようとするのは、「客観的現実」でも、「当事者の主觀にとってのリアリティ」でもないが、一方でそれは主観主義的、相対主義的な主張を行うものでもないのである。

6. データ

本発表で使用するデータは、発表者を含む「エスノメソドロジーと教育研究会」のメンバーによって、1995年4月から6月にかけて、関東近圏の2つの小学校において録画されたビデオデータに基づいている。教室にはその「前部」および「後部」に2台ないし3台のビデオを設置し、それらの録画記録をもとに、トランスクリプトを作成した。

（トランスクリプトと具体的な分析については、当日配付させていただきます。）

【参考文献】

稻垣恭子(1991)「教育社会学における解釈的アプローチの新たな可能性」『教育社会学研究第47集』

稻垣恭子(1992)「クラスルームと教師」柴野昌山・菊池城司・竹内 洋編『教育社会学』(有斐閣ブックス)

Macbeth, D.H. (1987) "Management's Work: The Social Organization of Order and Troubles in Secondary Classrooms." unpublished dissertation. University of California, Berkeley.

Macbeth, D.H. (1991) "Teacher Authority as Practical Action.", Linguistics and Education 3

Macbeth, D.H. (1992) "Classroom "Floors": Material Organizations as a Course of Affairs.", Qualitative Sociology, Vol.15, No.2.